

冬山・雪山シリーズ第1回「初冬の富士山」

(報告) Toyo

◎日程：2018年11月23日～24日

◎メンバー：Kon (L)、Fuji、Toyo

これまであまり考えないようにしていた雪山だが、2017年12月初めの冬山シリーズで連れて行っていただいた安達太良山で、厚みのある雪の上をアイゼンで歩くのは地面の凹凸を感じずに済んで意外とラクなのだと知った。加えて、シーズン最初の氷点下で体が冬モードにきっちり切り替わり、一冬風邪知らずで過ごせたこともあり、今シーズンも冬の初めの(きっと易しい)雪山シリーズに参加しようと、まだ暑いうちからもくろんでいた。

そして発表された今年の雪山シリーズ。第一弾は「え、富士山？」 富士山と言え、低温と強風だ。2番目に高い北岳よりも頭一つ出た日本一のお山だ。自信はほとんどないが、物は試しと尋ねたところ、「行けると思う」との返信。そう言っていただけ言葉に乗るような形で、思い切って参加を決めた。

思い切って、というのは経験だけでなく装備もほとんど持っていないためだ。幸いアウターはお借りできることになった。自分で用意するのは靴とアイゼンとピッケル。靴とアイゼンは一緒にじっくり検討してくれるお店に出会うことができ、何度も通って購入した。ピッケルは、数年前まで登山をしていた叔父から譲り受けた。これで足回りはOK。

不安なのは技術的な部分で、会の雪山向けの資料をダウンロードして読んだ。準備はこれくらいしかできなかった。

1日目、八王子駅を8時に出発し中央道へ。途中うとうとしてしまい、目が覚めたら既に大月を過ぎて河口湖へ向かっていた。雪をかぶった富士山が近づいてくる。これから登るのだという気持ちのせいか、いつもより大きく迫ってくるようだった。

<佐藤小屋付近からの富士> →

今回は、五合目(標高2230m)の佐藤小屋に前泊して、翌日早朝から山頂に向かう計画だ。小屋に到着後、分岐で間違えないように



明るいうちに下見に出た。六合目の辺りでは、二十人以上の団体が 2 つ、雪上訓練しているのが見えた。私は知らなかったのだけれど、昔からこの時期の富士山は雪訓によく使われるとのこと。しかし今年は雪が少なく、七合目近くまで行っても満足に訓練できなかったようだ。

彼らは香港と大阪からのパーティ。他にも徳島からのグループも来ていた。大阪と徳島は前夜に車で地元を出てきたと聞いた。小屋に戻ってからも、すっかり暗くなってから単独の割と軽装のドイツ人が、これから馬返しまで下山するので朝送ってくれたタクシー会社に電話してくれないかと頼みにきた。翌朝も暗いうちから単独の外国人が小屋で静かに休んで、すっと出て行った。

普段から富士山を眺めることができる南関東在住だと気が付かないが、この時期ですら関西や四国、海外からはるばる人を呼んでしまう富士山の特別さを改めて感じた。また、雪山としてもメジャーなのだと初めて知った。

翌朝は 2 時半起床、ヘルメットとヘッドライトをつけて小屋を 4 時に出発。六合目から吉田ルートに入る。しばらく行くと、今回の山行を企画してくれた幹事さんが、自分はゆっくり行くから先に行っておっしゃるので、リーダーと私は少し先行する。次第に溶岩でゴツゴツの道が雪に覆われ始めた。5 時半を過ぎると徐々に東の空の端がオレンジ色に染まってくる。6 時頃、七合目の、その名も日の出館のテラスで日の出を待ちつつ、アイゼンをつけることにした。

新品のアイゼンをザックから取り出し、靴に履かせる。事前に家で何度か装着の練習をしたが、予想通りもたもたする。手袋をしたままつけることができない。結局手袋を脱いで素手で作業となった。手袋をつけたままの素早い装着は今後の課題だ。

<日の出館より> →

そうこうするうちに幹事さんも追いついたが、自分はここまでにする、どうぞ先に進んで、とおっしゃる。申し訳なく思いつつ



も行けるところまで行くことにする。出発の準備はできたがなかなか日が昇らない。仕方なく歩き始めたら、すぐに灌木の向こうに顔を出した。なんだか中途半端なご来光となった。

ここから先は徐々に標高が上がり眺望が変わってきた。振り返ればクジラの形の山中湖。高く登るほどしっぽの形が良くなる。その右側は雲海だ。左に目を移すと八ヶ岳。南アルプスは甲斐駒が見えたり隠れたり。見上げた富士の斜面は時折強い風が吹き、雪煙が上がる。

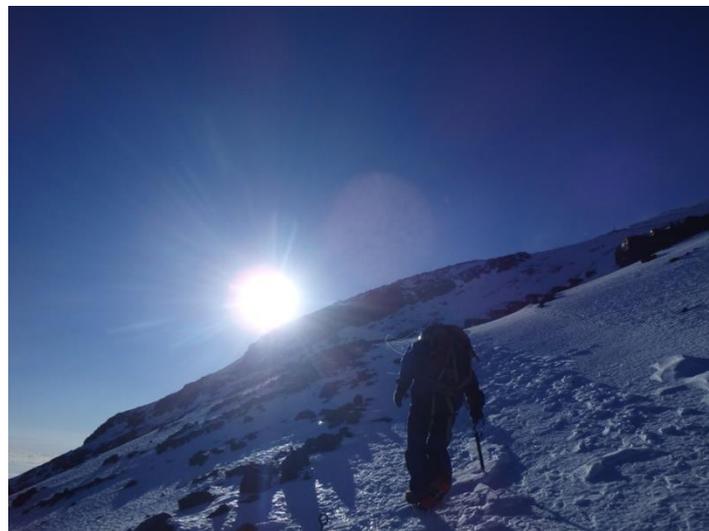
< 3000m 付近を登る > →

登山道の溶岩が完全に雪に隠れるようになってきた。雪面は太陽の光を反射して、てらっと光っている。固く

はないがそこそこ凍っているのだ。突風が吹いたときは、少し体をかがめてやり過ごす。恐れていたような強い風ではないが、高度を上げればもっと強烈になるのではないかと想像すると少し怖い。頂上まで行けるだろうか。

リーダーが斜面を見下ろし、ここで滑ったら止まれるところがあまりないとおっしゃる。確かに。時々溶岩がむき出しのちょっとした凸面があるが、そこで止まれるかどうか。勢いがついたら通り越してしまうかもしれない。私が雪山初心者であることも、リーダーにとっては考慮の対象だ。どこまで行くかは完全にリーダーの判断に委ねている。

八合目エリアに入ってきた。ときどき山小屋のテラスでストレッチしながら一息ついて景色を眺める。八ヶ岳の左側にうっすらと北アルプスの山々が見える。



斜面を見上げると大きなテラスが見えた。とりあえずそこまで行こうと、ゆっくりと登る。白雲荘、標高 3200m。

← 《白雲荘》

ここまで 990m 登ってきたことになる。突風があることと、これから先の斜面の凍

結具合を鑑み、ここで今回は切り上げることにする。残念な気持ち 20%、ほっとした気持ち 80%というところ。しっかり休憩して、念のためここから腰にロープを巻いて後ろから確保してもらいながら下ることになった。

<白雲荘より山頂を望む> →

道はつるつるというほどではないし、特別に長い距離を下るわけでもない。

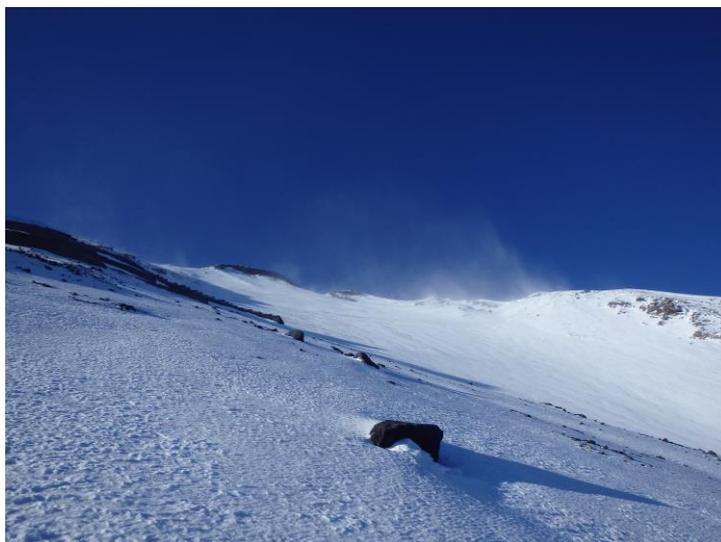
気持ちと体力に余裕をもって、足元を確認しながら下っていく。

途中、他に歩く人もいなかったなので、リーダーが雪訓をしてくださった。固く凍った箇所ではピッケルを振り下ろして自分の身を確保するには最低でもどの程度は打ち込まないといけないのか、ロープでつないでいる相手が滑ったらどのように確保するのか、どれくらいの力が必要になるのかなどを体験させていただく。

やがて登山道に溶岩が露出してくるようになってきた。リーダーはひよいひよいと行くが、私は慣れないアイゼンで下りにくくて仕方ない。

途中の山小屋の前でアイゼンを外し、おやつを食べたりおしゃべりをしたりして、すっかり気持ちに余裕ができ、改めて眼下を見下ろした。早朝は雲海の下だった東側はすっかり雲が取れ、海が見えている。おや、あれは江の島？ということは、この海は相模湾だ。ならば、山中湖のすぐ向こうに見える山並みは丹沢ということになる。一番海に近く、きれいな三角に見えるのは大山。塔ノ岳、蛭ヶ岳とたどる。ぐっと北側に目を移せば甲府盆地の端が見える。湘南から甲府まで、移動すればそれなりに時間がかかる距離だ。それが一気に見渡せる箱庭感。湘南海岸から見た富士山、通勤電車から見る富士山、職場から見る富士山、中央道を走っているときに見える富士山、登山で見た富士山を思い浮かべる。それぞれの場所から見たそれぞれの富士の風景。周りに大きな山がない背の高い独立峰の存在感とはこういうことなんだ。そして逆に言えば、富士山はいつも全部見渡しているということになる。

出発点の山小屋には12時丁度に着いた。私たちの後に戻ってきた大阪のパーティも八号目で引き返したと聞いた。



もし私をもっと雪山経験を積んだバディだったらリーダーを心配させることもなく、頂上まで行けたかもしれない。そう思うと申し訳ない気持ちがする。

だが、初心者としては八合目までで満足。むしろ山頂まで行けていたら、拍子抜けしたかもしれない。もっと経験を積んで、今より自信を持って雪山に対峙できるようになったらまた来たい。その時登頂に成功したら、今よりずっと喜びが大きいような気がする。そしてその時は、大好きな北岳を見下ろしてみたい。

<コースタイム>

11/23 12:24 佐藤小屋発（下見）－13:07 六合目付近－14:00 佐藤小屋戻り

11/24 4:00 佐藤小屋発－5:42 花小屋－6:00-6:25 日の出館－7:34 太子館－8:22-8:34 白雲荘(3200m 戻り)

－10:15 鳥居荘－12:00 佐藤小屋